

加賀藩御定書卷一

寛永以前御定書

一 喧嘩・徒黨・諸勝負其他御定

定

一、喧嘩者理非に不立入、双方可成敗。次其庭に懸向候者、（モト）縦さへ人たりといふ共、一切可令停止。勿論勝負として相集者、可爲同罪事。

付、相手殺害之上其庭を相退候はゞ、親・兄弟并彼妻子爲隣單可押置、遂穿鑿依輕重可成敗。もしみのがすにおしては、近所之者可爲越度事。

一、徒黨を立者有之者、開出次第不寄上下可申付事。

一、諸勝負方之事、最前如申出候堅令停止畢。若妄之儀於有之者、開出次第可申上。然者發美として其者之跡職、不寄上下可遣之事。

一、狼藉人誰々之所に懸入候事有之者、則亭主として令成

敗可出之。或見廻或於抱置可爲曲言事。

一、往還之者於途中殺害之事、遠近を改、近所之村人可糺明事。

一、盜人・惡黨、知行之内不可隱置事。

一、致謀警覺者可誅罰事。

一、侍并小者出入之事者、天下如御法度三度相届、於不返者奉行所可申斷。其時理非相究可裁許。若背御法度、路頭に而於相捕者、彼小者當主人に可相付。但彼小者居候所先主於不知者、捕候而當主名字を相尋、渡置可及斷。若彼小者當主之名を於不申者、奉行所可相渡。若又雖相届候、不返置内に角小者走候はゞ、當主より人代可遣之事。

付、取替者、小者先主人返候に於ては、其取替之分十二月に割合、小者奉公之月數程引之、殘分當主に可返付事。

一、在々百姓等、等類之内申分於有之者、奉行所に罷出可申。若私として申事仕出におゐては、手出之方可成敗事。

一、逃散之百姓相抱候はゞ、宿ぬし可成敗。其村としては家別に米一石宛可出之事。

一、百姓奉公に出候はゞ、年月を究、互之誓物にて可相定